根城小

主体的に学び合う子の育成

～各教科における対話的学びの実現を目指して～（３年計画の３年次）

校長　中　村　雅　臣

１　研究主題について

昨年度、本校では、「主体的に学び合う子の育成」という研究主題のもと、児童の考えを深める対話的学びの在り方と認め合う場の工夫に焦点を当てて研究を進めた。全学級が研究主題に沿った授業を様々な教科で実践し、検証してきた。研究の成果として、次の点があげられる。

・課題設定場面では、既習事項を想起させて課題と関連付けたり、課題解決のためのイメージをもたせる資料提示を工夫したりする手立てを取り入れた。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組む姿が見られた。

・伝え合う場面では、「身振り手振りを取り入れて表現させる」「分かりやすく書いて伝える」「教師が全体の合意形成をサポートする」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、友達と関わり合いながら学ぶよろこびを感じさせることができ、学びに向かう主体性が高められた。

・認め合いの場面として、小グループでの伝え合いの後に相手の話した内容に対する励ましや評価をしたり、学習内容のまとめや感想のふりかえりの他に、「友達のいいところ」を視点として与え書く活動を取り入れたりした。これらの活動により、互いに認め合う姿が見られ、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

また、昨年度のＣＲＴの結果（観点別得点率全国比）を見ると、ほとんどの学年において、全ての教科の「思考力・判断力・表現力」に関する観点別の得点率が、合計得点率を上回っていた。上記の点から、日常の授業において、追究意欲を高める課題設定や対話的学びの工夫をした授業を展開することで、児童の「思考・判断し、表現する力」を伸ばすことができたと思われる。

一方、課題として、次の点があげられる。

・課題提示の工夫により、児童は意欲的に課題に取り組もうとするが、自力解決では活動や思考が進まないという場面も見られた。課題を自分のものとしてとらえさせ、より具体的な見通しをもたせるなどの教師側の働きかけを工夫していく必要がある。

・伝え合う場面では、話合いの目的が曖昧になってしまった実践も見られた。自己の考えを広げ深めるための対話的な学びの実現のために、伝え合う活動の目的を明確にし、児童にも目的意識をもたせた授業展開を考えていく必要がある。

・認め合う場面では、友達の頑張りを認めるだけでなく、交流した内容のよさや共感できたことにも着目させることが次の学びへの意欲につながると考える。認める内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような認め合いの場を設定して、学び合いのよさを実感させる必要がある。

そこで、今年度は、昨年度までの研究を踏襲し、「児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動と認め合い」について、全教科での授業実践により研究することにした。具体的な見通しをもたせる働きかけや、目的を明確にした対話的活動・認め合いの内容や方法の吟味を授業で実践し、より充実した対話的学びについて協議していく。そのような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

２　研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。（課題と向き合う、伝え合う、認める・認め合う）

３　研究仮説

対話的な学び（課題と向き合う、意思表示・伝え合う、認める・認め合う）の工夫をすることにより、児童が主体的に学び合うことができる。

４　研究内容

対話的な学びの工夫

ア　考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫（課題と向き合う）

イ　目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定（意思表示・伝え合う）

ウ　学習意欲を高める認め合う場の工夫（認める・認め合う）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	曜	授業研究	全体会等
４	１３	水	今年度の研究の方向性について	全体会（共通理解)
６	１５	水	指導案の書き方・授業実践構想	全体会（授業研究）
６	２２	水	授業実践構想・指導案検討	学年ブロック
７	１３	水	指導課・センター訪問 校内研授業研究学年の授業研究(４年)	全体会（授業研究）
９	１４	水	授業実践報告・一人一台端末活用研修①	全体会（授業研究）
９	２１	水	校内研授業研究学年の授業研究(５年)	全体会（授業研究）
１０	１９	水	授業実践報告・一人一台端末活用研修②	全体会（授業研究）
１１	１６	水	授業実践報告・指導案検討	全体会（授業研究）
１２	１４	水	校内研授業研究学年の授業研究(１年)	全体会（授業研究）
１	１２	木	校内研修アンケートの結果と研究のまとめ	全体会(成果と課題)
１	２５	水	来年度の研究の方向性について	全体会(成果と課題)

＊授業研究学年以外の先生方は、校内研究の視点にそった授業の実践報告を全員行う。

(2) 一般研修等

月	日	曜	一般研修	備考
５	２５	水	児童理解　配慮を要する児童(通常学級) 児童への支援の仕方	全体会
６	１	水	児童理解　配慮を要する児童(ひばり学級) 児童への支援の仕方	全体会
７	２０	金	教育課程研究集会	
８	２２	月	不審者対応研修	外部講師
８	３１	水	県学習状況調査分析・考察	
２	２２	水	ＣＲＴ分析・考察	

６　研究の成果

(1) 課題設定場面では、国語科において「図鑑を作ろう」という児童が意欲的に活動できるめあてを設定したり、教材の一文を変えて提示したりすることから、驚きや気付きが生まれ、考えたくなる課題が成立した。また、道徳科では、「誠実」という言葉の意味の理解を具体例により把握させてから、「誠実かどうか」という話合いをした。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組むことができた。

(2) 伝え合う場面では、「短冊を操作させる」「図を使って話し合う」「自分の立場を明確にしてから話し合う」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、学びに向かう主体性が高められた。

(3) 認め合いの場面として、全体での児童の発言を受けての肯定的な反応や、ペアでの伝え合いの後に相手の頑張りを認める言葉を日常の授業の中でも意識して指導し、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

７　研究の課題

自力解決や伝え合う場面において、児童全員の学習がスムーズに成立するために、どのような助言や補足が効果的であるか、できる限り準備しておく必要がある。また、認め合う場面では、日常の学習で発言を受けての反応の仕方や、友達の良いところを学び学習の見通しを意識することが、次の学びへの意欲につながると考える。内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような授業展開を考え、学び合いのよさを実感させていきたい。　（記入者　荒屋敷　智保）